熊本大学学術リポジトリ

別れては : 文苑

著者	花柴
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１２３
ページ	６７-６８
発行年	1907-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/6079

蹟の罪の跡、ふとみかへりて
うなだれぬ。

かくてわが
眼光にてらされ〜罪の蹟跡は
億年に消ゆるかく懺悔の胸に
鞭あぐ。

たかしさよ。
こゝより見れば罪の人の笑止さ——
眞日をも敷石にそひゆく罪の
影あるを。

（完）

別れては

花柴

唯『運命よ』と睡れし眼の
君が睫毛に白玉とべど
怨言といはず——凭れたる
み胸の鼓動の温かき
響は「時」の闇黑に
消ゆて三年の恨かな。

いま人づまの君あれば
戀の生命はここととはに
絶ゆて醜き遺骸も
紀念と秘めし文からの
文匣抱けば青春き日の
血汐に呪咀は燃ゆるなれ。

賜ぴし玉章とり出ては
燒かんに惜〜き躊躇よ。
紅梅に鶯啼くあした
青葉に戰ぐ涼風の宵
露に虫なく月の夜半
火桶に對す雪の日や

東屋の南窓
紫檀のにをう文机に
君や凭れてふくよかの
圓ら玉首の眞玉手に
馨りは高き唐墨を
赤間關硯に當てつらむ。

紅葉流るゝ透かし画の
卷紙さらと擴げては
よき歌もがと項曲げ——
多澤の前髪搖れにけむ。——
筆の穂さきをみつむると
鳩の瞳ぞ忍ばるゝ。

折々もらす、ため息は
鬢の後毛ゆらがして
餘りは紙に戰ぎけむ
牡丹と匂ふ唇に

印紙、封じ目、——當時の
接吻のごと、——觸れにけむ。

燒くに躊躇う夕かな——
涙し流る徒らに。
夢か文がら火にすれば
薄霧落ちて低く這ふ
煙の末の立ち姿——
抱けば消ねて三ヶ月の影。

古き調

白月

月清く
松風くらき磯づたひ
たもわ背むけて行くは誰ぞ
戀ならば
母や待つらんとく歸れ